支部だより

カイロ支部

小熊＜藤原＞利江（D平１）

4月28日に本年1回目のカイロ外語会が、ナイル川沿いのホテル内のレストランにて開かれました。支部会員15名中9名の参加がありました。

昨年より正式にカイロ支部として登録されてからは、年3回「外語会報」が送られてくる度に、それを配る名目で食事会を開いています。エジプトはイスラム教国ですが、お酒は飲めます。よく食べ、よく飲み、ほどよく酔って涼しい春の夜をみな歩いて家路につきました。というのも偶然、参加者全員が近所に住んでいたのです。西ヶ原の下宿街を思い出しました。

転勤族の多いカイロ外語会はメンバーの入れ替わりが頻繁です。今回は谷生俊治さん（D平10、GD平12）と後藤絵美さん（Pr平12）の初参加で盛り上がりましたが、出会いがあれば別れがあるのが宿命です。

私事ですが、夫・小熊宏尚（R昭63）とともに帰国するため、約3年間（カイロ支部の発足後1年半）の幹事役に終止符を打つことになりました。 今後も皆様のご活躍をお祈りしています。

（左から）宮迫敏信（A平１）、大岡誠一（S昭50）、小熊宏尚、後藤絵美、金沢＜佐野＞豊美（In昭62）、谷生俊治、小熊＜藤原＞利江、金沢浩明（E昭61）、岡本道郎（A昭58）

ワシントン支部

菱川摩貴（E平2）

5月6日、3年半ぶりのワシントン支部会を、地元中華料理店「四川飯店」で開催しました。参加者6人とこじんまりした会でしたが、お互いの滞米経験、海外経験を語り合い、話題がつきませんでした。当日は、ワシントンで中国関連ビジネスに従事されている井澤久美子さん（C昭57）に料理を選んでいただきました。お蔭様でメニューにはない"知る人ぞ知る"四川料理を満喫することができました。

ワシントン支部会はこれで六回目になります。第一回は1993年2月、地元高級日本料理店「ジャパン・イン」で開催されました。大阪外語大卒業生の方も含め、総勢40～50人が集まり大盛況。当時の参加者は圧倒的に男性が多く、また平成卒業生は菱川（E平2）だけでした。

（左から）：マッケーミイ（旧姓：山口）裕子（E昭41）、中村（旧姓：落合）慶子（S昭 60）、菱川摩貴（E平2）、岸本憲明（S昭 51）、シャーマン（旧姓：松本）和子（R昭 47）、井澤久美子（C昭57）

その後、支部会は2年に一度のペースで開催されました。ワシントンは人の入れ替わりが激しいのが特徴です。日本から赴任された方も2～4年で帰国されるため、名簿の更新が追いつかない状態が続きました。また1990年代半ばから後半にかけ、ワシントンの拠点を閉鎖・縮小する日本企業が増えたこともあり、外語卒業生

の数は減る一方でした。同時に目立ってきたのが女性陣の台頭です。このたび第六回の会は、参加者唯一の男性、岸本憲明（S昭 51）氏に奮闘していただきました。

今回の支部会をもって、幹事は菱川から、シャーマン（旧姓：松本）和子さん（R昭 47）に交代することが決まりました。今後、ワシントンにご在住で未登録の卒業生の方は、シャーマンさん（KazukoSMN@aol.com）にご一報ください。

4人でシカゴ外語会

土屋　隆（E昭50）

7月27日（水）の夕刻、シカゴ市の北西約50キロに在るショーンバーグ市の日本料理屋で、東京外大３名と大阪外大１名の同窓生が集い、東京・大阪合同でシカゴ外語会を開催しました。永く居住する同窓生も、当地で同窓生に出会ったことはほとんど無かったとのこと。会合は自己紹介から始まり、学生時代の思い出などで盛り上がりました。参加者（敬称略）は、池永清（S昭45）、土屋隆、金子幸世（U平6）そして大阪外大のデイ多佳子（イスパニア語科昭52）。

シカゴ市近郊には製造業を中心に約500の日系企業があり、在留邦人も8,000人ほどいます。赤門会、三田会、稲門会などが活発で、うらやましい限りです。

同窓生は、ジェトロ・シカゴ事務所の土屋Takashi_Tsuchiya@jetro.go.jpに是非ご連絡下さい。

参加者（左から）デイ、金子、池永、土屋

青島支部

塚本俊朗（C昭57）

今年初めに前任幹事より青島外語会の幹事を引き継がせていただきましたが、当地区の会員の把握が未だ思うように出来ておりません。現在私を含めて2名（3名でしたが７月初めに1名が帰国のため）しか判明しておりません。北京や上海にはたくさんおられるのに、残念な次第です。

当地の日本人会の統計では、青島市内全域に日本人は約2,500人、駐在やその家族及び留学生の身分で滞在しているとのことです。日本人会に登録している日系企業は、一部青島以外の山東省の企業も含め約300社となっています。

お知り合いの方で青島を含めた山東省内に会員の滞在情報がありましたら是非ご連絡お願い致します。

新市街地のメインストリート香港路

青島支部からの寄稿は初めてですので、青島について紹介をさせていただきます。山東省の南東部に当たり、直線距離ではほぼ北京と上海の中間地点に位置します。青島市街地は、それまでの発展遅滞に比べ90年代後半からの発展は目ざましく、旧市街の東側に新市街が出来ており、旧市街には今まだ多く残っているドイツ租界時代の遺物である赤煉瓦屋根の建物が多い一方、新市街地には高層ビルの林立も目立ち始めています。この町は昨年来、「中国でも最も元気な都市十選」にも選ばれ、元々観光都市としての「美しい町、青島」と、工業、商業発展とのバランスを模索中のようです。

GCC支部設立

末光信裕（F平8）

この度、中東湾岸諸国で活躍する外語OBの心のオアシスとして、「東京外語会GCC支部」（GCC: Gulf Cooperation Council「湾岸協力会議」加盟国は、サウジアラビア、バーレーン、クウェート、オマーン、カタール、アラブ首長国の6カ国ー編集部注）を新たに設立致しました。昨今勃発するテロ、民族紛争、宗教対立等々、中東というとネガティブなイメージが拭えませんが、他方石油を始めとした自然資源の宝庫であり、各地域で石油関連、建設関連他、大型プロジェクトが目白押し、そんな大きな舞台で会員各位頑張っております。同地域においてはOBの異動がとても頻繁で、中々所在がつかめずに大変苦労致しましたが、何とかこの度会員5名（アラブ首長国連邦2名、オマーン2名、イエメン1名）を集めることができ、会の設立に至った次第です。今後徐々に会員数を増やし、他の東京外語会海外支部に引けを取らない会に育てて行きたいと思っております。当面の活動としては、先ずは会の発足集会を開催し、以後半年に一度を目処に親睦会を企画、色々な情報交換の機会として会員の皆様に有効利用して頂きたいと考えております。また、同部会を盛り上げることで、中東のネガティブなイメージを払拭したい、そんな気持ちも会の設立の趣旨に込められております。また適宜活動状況を報告致します。お楽しみに。

（在アラブ首長国連邦）

デュッセルドルフ支部

芹澤美妃（D平11）

今年2度目のデュッセルドルフ外語会は、5月28日に当地で行われた「日本デー」に伴って来独された千葉県日独協会常任理事橋口昭八氏（D昭31）を囲み、6月1日、市内の中華料理店で行われました。

「日本デー」は1999年から2000年にかけて開催された「ドイツにおける日本年」に引き続いて2002年から始まった文化・市民交流行事で、今年で4回目を数えます。

邦楽や日本舞踊、武道や書道等の伝統文化に加え、今回はヨーロッパでもブームになりつつある日本の「マンガ」がメインテーマとなり、新しい日本文化を紹介する場となりました。当日は30度を超える暑さの中、ライン川沿いに建てられたブースや舞台、日本食の屋台は多くの人で埋まり、フィナーレの日本花火には100万人以上の人が来場するなど大盛況に終わりました。

2002年までデュッセルドルフ日本クラブに勤務され、今回約3年ぶりに「里帰り」をされた橋口氏からは、千葉県とデュッセルドルフの交流、またメッセや国際空港などの優れた国際拠点や豊かな自然といった両者の持つ共通点などのお話を伺いました。その他、西ヶ原キャンパスや教授の思い出話から第一次世界大戦中に日本に存在したドイツ兵捕虜収容所についてなどテーマは尽きず、円卓を囲みアルトビールのグラスを傾けるうちにあっという間に閉会の時間となりました。

現在会員数約20名の当外語会は年に数回の会合を開いております。デュッセルドルフと名はついていますが、会員の方の居住地、語科等は問いません。現在市内及び近郊にお住まいの卒業生の方々、ご連絡お待ちしております。

（dusgaigo@hotmail.com　幹事　宮原きりは、芹澤美妃）

参加者（卒業年順）橋口昭八、伝田敦夫、福田幸夫、三丁目俊三、栗林重徳、依田健一、宮原きりは、芹澤美妃

幹事のカメラが故障中のため、今回は残念ながら写真がありません。ご了承ください。

ロンドン支部

小倉かおる（R昭59）
加藤　直子（H平11）
小野満　剛（D平12）

ロンドンでは、多才な皆さんの専門知識からちょっとした話題を提供していただこうと、ここ数回、ミニレクチャー方式を取り入れ、好評を博しています。

5月6日

「日本語情報誌『ジャーニー』ができるまで」

おいしいPizza、Pasta、ワインをいただきながら、ロンドン在住の日本人がいつも気軽に手にしている月刊・週刊『ジャーニー』ができるまでの道のり、裏話等を『ジャーニー』の副編集長石野斗茂子さん（E昭63）にお話しいただき、今後の『ジャーニー』に期待することなどについて読者の視点から意見交換が行われました。貸切の地下フロアで日本語が飛び交い、西ヶ原の外語大跡地の再開発が本格化するというニュースもあり、意識は東京に飛び、ここがロンドンであることをしばし忘れたようなひと時でした。

ロンドン在住の先輩方がどのような分野でどう活躍されているのか、興味津々で初めて参加させていただきましたが、様々な苦労をされつつも各分野で国際的に活躍・貢献されているのを目の当たりにし、視野が広がるとともに、少しでも先輩方に近づけるように目標は高く持たなければと改めて考えさせられました。

（加藤直子）

6月17日

「イラク戦争とブレア政治」

今回の外語会では、4年にわたるロンドン駐在に終止符を打ち、9月上旬に日本に帰国される予定の時事通信社の持田譲二さん（D昭59）に語っていただいた。熱気こもる店内を一台の扇風機が必死に21名の参加者に風を送るものの、宴が盛り上がるとともに話は益々熱気を帯びていった。

これまでのロンドン外語会が「文化的昇華」に眼目が置かれていたなら、今回は一風変わって「政治的論考」が主題となった。一通りの自己紹介が終わると、予定されていたように持田記者のスピーチが始まった。テーマは「イラク戦争とブレア政治」。記者の目を通して、また過去の取材の集大成として、2003年のイラク戦争の余波、今後の英国の役割や開戦理由にまつわる問題等について語った。

日本や米国と比較して、大英帝国の遺産のせいか、あるいは単純に地理的により近いせいか、アフリカや中近東の出来事が英国にいると身近な出来事のように思える。その為か、出席者一同、ワイングラスを傾けながら、相槌を打ち、あるいは首を傾げ、持田記者の演説に耳を傾けていた。

スピーチ後も暫くはそれぞれの思うところを語りつつ意見交換が繰り広げられ、そして夜が深まっていった。決してシャッチョコ張った雰囲気の中で行われた訳ではなく、終始、和気藹々として楽しい夕餉となった。これもまた外語会。

後日談として、今回の外語会後、持田記者は7月に起こった二度のテロ事件の取材に追われ、東奔西走されている。ロンドン外語会も、テロの脅威に屈することなく開催されることでしょう。

（小野満 剛）

両会とも、ロンドン中心部イタリアンレストランL'osteria57にて。

両会の出席者：石野斗茂子、遠藤暁（V平11）、小倉かおる（R昭59）、小倉正広（D昭57）、落合拓郎（H平10）、小野満剛、加藤直子、酒井一雄（E昭48）、佐々木紀子（R昭58）、高橋美和子（E平8）、中村真理（C昭60）、原田豊（S昭40）、広澤明（D昭40）、廣瀬尚文（R昭51）、福田昭久（D平2）、南潤一郎（R昭54）、南富美子（E昭54）、持田譲二、山崎美恵（I平11）、山田秀樹（D昭49）、山根永久（S平4）、横川正博（F昭53）、吉村麻実子（R平12）、河内知子（Po平3）、片山順子（R昭60）、岩津桂子（E昭51）、伊藤夏人（C平9）、奥田葉子（R平7）。